

「一闍提菩薩」

宮田 素樹

一

まず、最初に『大無量寿経』から二つの文を拝読させていただきます。

阿難、諦らかに聴け。今、汝が為に説かん。」
対えて曰わく、「唯然り。願樂して聞きたまえんと欲う。」
(『真宗聖典』第二版 9 頁)

もう一文は流通分です。

是の故に弥勒、設い大火有りて三千大千世界に
充滿せんに、要ず当に此れを過ぎて是の經法を
聞きて、歡喜信樂し、受持誦誦し、説の如く修
行すべし。所以は何ん。多く菩薩有りて、此の
經を聞かんと欲えども得ること能わず

(『真宗聖典』第二版 93 頁)

改めまして、よろしく願ひいたします。本日は

法話時間、一応、一時間プラス質疑応答ということ
でお話をさせていただきたいなというところでござ
います。ですの、あまり時間がないということをし
思っております。サクサクと進めていければと思
うんですけれども、講題としては「一闍提菩薩」と
いう講題をあげさせていただきました。一昨年に「闍
提菩薩」ということで講題を出させていただきました、
て、お話をさせていただきました。言うまでもなく、
一闍提、闍提、同じことですけれども、イッチャン
ティカという、『涅槃経』に出る言葉ですね。断善
根とか、信不具足とか、極欲という意味の言葉です。
親鸞聖人は総序において、「逆・謗・闍提」という
ことで、『大無量寿経』に出る「五逆」それから「誹
謗正法」ですね、それから「闍提」、この三つをあ
げて、救われ難きもの、その三機としてあげてお
られます。信巻の後半のところにおいては、「難化の
三機」救われ難き三つの機根ということでの言葉
をあげておられるわけですね。まあそこを今日は詳
しく述べるといふことはしませんで、何を詳しく述
べたいのかといったら、まさしく、闍提、一闍提と
は何なのか、何を私たちに教えていただいている言
葉なのか、このことを少し皆さんと一緒に考えさせ

ていただきたいなということで、このような講題をあげさせていただいたわけでございます。

これは一昨年にも少し取り上げさせていただきましたが、この難化の三機の前二つ、五逆と誹謗正法については『大無量寿経』巻上においては、第十八願、

設け我、仏を得んに、十方衆生、心を至し信樂して我が国に生まれんと欲うて、乃至十念せん。若し生まれずは、正覺を取らじ。唯五逆と正法を誹謗せんをば除く(『真宗聖典』第二版19頁)願文において唯除の文ということであげられております。下巻の冒頭にあります成就文において、第十八願成就文ということですね。

諸有衆生、其の名号を聞きて、信心歡喜せんと、乃至一念せん。心を至し回向したまえり。彼の国に生まれんと願すれば、即ち往生を得て不退転に住す。唯五逆と誹謗正法とを除く

(『真宗聖典』第二版47頁)

と。唯除の文ということであるわけでありませう。それで、このことについて、これは何を言っているのか。信巻に善導大師の文を引いておられます。善導のご文はこういう言葉ですね。

仏願力を以て、五逆と十惡と、罪滅し生を得しむ。謗法・闡提、回心すれば皆往く

(『真宗聖典』第二版315頁)

このような形で善導大師はこの五逆とそれから誹謗正法、さらには闡提も回心すれば仏願力において、回心すれば皆往生を得ることができると。そして親鸞聖人は『尊号真像銘文』において、

「唯除」というのは、ただのぞくということばかり。五逆のつみびとをきらい、誹謗のおもきとがをしらせんと。このふたつのつみのおもきことをしめして、十方一切の衆生、みなもれず往生すべしと、しらせんとなり

(『真宗聖典』第二版628頁)

この二つの罪の重き科をしめして、十方一切の衆生、みなもれず往生すべしと、しらせるために十八願成就文に唯除の文が示してあるんだと、こういうことがいわれているわけですね。

色んな方がこの文を取り上げて、教えていただいておりますけれども、今日は一つだけ、蓬茨祖運先生が述べられた文章が心に残りましたので、それだけ、紹介をさせていただきます。

唯除五逆誹謗正法は惡人の自覺です。ここで問

題になるのは除くという意味です。いわゆる捨てることなのか、捨てないことなのか。もし捨てるならば除くということをする必要があるかもしれません。除くというのは特別に注意せしめる貼り紙です。そういう貼り紙があると、その中を覗きたくなります。そこを捕まえるわけです。これが無いと他力という意味がなくなるのです。みんな助かるというのでは他力という意味が出て来ません。

こういうふうに蓬茨先生はいわれるんですね。貼り紙が貼ってあるんだと、十八願文に。そうしたらそれを覗きたくなる、そこを捕まえんだなんていう表現をされています。もう一つ、同じ本の中で蓬茨先生はこういうふうにいわれます。

五逆と謗法はもともと仏法に救われる心を持たないものですから、除かなくてもひとりでに除かれていますのであります。特に除くと言われるのは自覚を促すためなのであります。つまり、自覚がないだけであって、自覚すれば誰が苦悩の衆生でないものがあるかということなのです。唯除の文が付いているのは、十八願と十八願成就文に限っており、これあればこそ『大無量寿

経』は大地に根をもつてこれたのであります。

唯除の文があるから、『大無量寿経』、親鸞聖人は「真実の教」というように教えていただいておりますが、それが大地に根をもつてこれたんだと。「天の宗教」「地の宗教」と曾我量深先生もいつてみえますが、上を上を目指す、これが私たちの普段のあり方、ひよつとしたら仏教においても修行を重ねることにおいて、今日よりは明日、明日よりは明後日という形で上を上を目指すようなことを考えるかもしれないけれども、そうではないんだと。地上に根をはっている、その根を確かめていくんだ。大地を掘り下げていく、地の宗教であると、こういうことがこの蓬茨先生の文章からも教えられることなんですね。

ではですね、唯除の文がそのように教えていただいているわけですけれども、では、五逆とは何なのか、謗法とは何なのか、さらには闍提とは何なのか、さらに言えば、それは誰のことをいつているのか。そういうことが俄かに課題になってくるわけです。言うまでもなく、それはこの私、衆生、私に呼びかけられている言葉ということですね。五逆ということについては、宗正元先生が「ご恩知らず」だとい

う形で教えていただいております。ご恩知らずですね。これも信巻の後ろの方で、五逆については「三乗の五逆」「大乘の五逆」と取り上げられております。謗法とは何なのか。これも信巻で曇鸞大師の八番問答を引く形で五逆の因になると、それが謗法、仏法を謗するということだと。仏法を謗るから五逆というご恩知らずの身のあり方になっていくんだと、こういう形で教えられているわけです。

では、闡提とは何なのか。これを考えていきたいところなんです。前回の時に、闡提とは何かというのを少し話をさせていただいた後に、夜、一杯呑んでいるような時ですけれども、貝沼先生のほうから、闡提というのは「無関心」ということだということに、宮城顥先生、また金子大榮先生もそのようにいつていたというようなことを教えていただきました。無関心。これが心に留まっていたんですけれども、その後、いろいろな本を読む中で、宗先生も無関心といっていました。宗先生はですね、五逆については「背いておるもの」、謗法を「見失っておるもの」、闡提を「無関心でおるもの」。こういう三つ、背いておるもの、見失っておるもの、無関心でおるものという言い方をされておられました。

た。さらには藤元正樹先生のものを読んでいました。藤元先生も闡提を無関心ということで取り上げておられました。さらに、藤元先生はですね、因習としての仏教、例えば先祖供養とか文化的な意味での仏教、これは知っているけれども、いわゆる我が身を明かすというような仏法、真実を求めるというようなその仏道、そのことには無関心なんだと、こういういい方ですね。こういういい方で教えていただいているわけです。

なんだ、先生方皆いつてるじゃないか、自分は勉強不足だったなあ、ということをおぼせられたわけなんですけれども、でもですね、一つ思ったのはですね、いや、しかし、自分は無関心じゃないと。こうやって聞法会にも足を運ぶし、親鸞聖人の言葉を学ぶ仲間がいるし、ご本尊に手を合わせるという、そういうこともしている。であれば、僕は闡提ではない。五逆、謗法ということでは、僕も言いたくないが、無関心ということでは、自分に当たらないんじゃないか。しかし、先ほども言いましたように、逆・謗・闡提というのは誰なのか。自分に、この私に呼びかけられた言葉、そう受け取ることはないのであれば、『大無量寿経』は単なる文献

ではない。教えにはならんわけです。では、闍提というのは何を言っていることなのか。こういうことが一つ疑問としてあったわけなんですね。

結論的に言ってしまうと、いつも時間が足りなくなるのでまず結論を言ってしまうんですけれども、仏法に出あっているつもりで、そこに腰を下ろしてしまっているこの私、これが闍提ということなんじゃないかなあということを思うわけなんですね。

俺は関心があるんだと思っている、その私のことをもう一度、もう一度というのは、常に常にもう一度、問い返してください、そのことが、特に闍提という言葉で教えられていることなんじゃないかなあということに思いたったわけです。

曾我量深先生、亡くなる直前に『中道』誌事件」という差別事件を引き起こすということがあります。真宗大谷派から出ている『部落問題学習資料集』というものがありますけれども、そこにその経緯などが書いてありますし、曾我量深没後五十年の時に教育学研究所が出した『教化研究』、残念ながら今日はお越しになっておられません、明日お話ししたく中山さんが、この『中道』誌事件』を取り上げて小文を書いていただいていますので、詳しくは中

山さんにもお聞かせいただきたいなあと思うんですけれども、ちよつと概要だけ言うそうですね、曾我先生が新潟の三条で「宿縁と宿善」というお話をされていく中で、差別言辞を用いたということなんです。いわゆる被差別部落のことを「特殊部落」という言い方をされるんですね。そうでない人たちが普通で、普通でない特殊な部落があるという言い方で、これは非常に差別的な言い方です。その言葉を曾我量深が用いたと。この時はですね、大谷派自体が部落解放同盟に糾弾を受けている真つ只中です。その中で、曾我先生がこの言葉を用いたということで、これはもう大問題になります。曾我先生はこの問題を最終的な解決を見ぬまま、亡くなっていつてしまうという、本当に最晩年の出来事になるわけです。『中道』誌というのは、その講演録が載った出版物ですね。これが出て発覚したということなんですけれども、その回収騒ぎが起ったりした、そんなさなかに曾我先生に会いに行くわけです。伊東慧明さんとか、藤代聡磨さんとかが会いに行かれるわけですね。その時に、一緒に行かれた方で朝野恩知さんという方がおられます。その方は大谷派のいわゆる差別の問題への取り組みを語る上では抜かすことのできない

大切な方です。朝鮮半島出身の方で、来日されて差別問題の苦悩から大谷派において部落差別問題に身を奉げて、そして大谷派僧侶にもなっておられる方です。曾我先生にも深く深く学んでおられた。その方もこの『中道』誌事件」があつた時に曾我先生のところに行かれたわけです。それで、その朝野恩知さんがですね、「曾我先生の往生されるお浄土に私はいけんですか」というふうに言われた。この言葉を聞かれた曾我先生が応答されたのが、後に「異なるを歎く」というふうにいわれる文章になるんですけれども、その時に曾我先生が言われたのがですね、

差別してはいかんということはよく知っている。
（差別言辞を）言うはずがない。その言うはずのない言葉が出たのは深層意識の中に潜んでいるんだ。染み込んでいる。これが出てきたんだ。慚愧のいたりだ。私は今まで機の深信というのは第一深信だといってきたけど、お恥かしいかぎりだ
（『部落問題学習資料集』）

と言われた、ということですね。それで、その場にいた、曾我先生に聞いておられた方々が、「それだ」と、「教学の問題はそこだ」といって、すぐ

に別室で伊東慧明先生がこれを文章にした。そして『中道』誌の読者の方々にそれを配布したということになるんですね。それで、その文章が、これは二種類あるんですね。曾我先生が直筆で書いたものと、それから『中道』誌の読者に送られたものというのがあつて、微妙に違いがあるんですね。こういういい方なんですね。少し端折って言いますが、「こういうこと（差別してはいかんということ）はある程度までは自分に分かっているのだが、口先だけの説法になっていて自分の生活になっていないことを暴露したのであります、まことにお恥かしいことである。これは私一人が全社会に問うべき責任であります。それが結局自分の頭の分別であつて、本当に自分の生活になっていないわけでないから他の人に眼を覚まさせる力がないわけであります」と。
「自分の生活になっていない」ということを曾我先生は慚愧されておられるわけです。先ほど言った、闡提ということですけれども、仏法に自分が出あつている、ある程度は分かっている、仏法とは何ぞやということを知っている。しかし、それが生活にまでなっていない、その慚愧、言ってみたら、その慚愧が改めて、道を歩ませるんだと。もっと言えば、

それ無しには道を歩むことが出来ないんだと。そういうことを、この「『中道』誌事件」、曾我先生の言葉から教えられるわけであります。

「自己を弁護せざる人」というのが『曾我量深選集』の第二巻にあります。これも概要だけ言うと、清沢満之先生の精神主義が周りから批難されていた、その批難に対して清沢満之は一言の言い訳も、弁護もせず、自分は罪惡を抱えた身である、ただそれだけだというふうに言われた、それを見た曾我先生は「まことに自己を弁護せざる人であった」と。なぜそうなのかということを、「如来に弁護せられおわりましたではないか」という言い方でいつておられるんですね。我が身は如来が弁護し終わつたんだと。今さら自分が何か言い訳とか、弁護とかする必要はない、自分の行いについては如来が弁護していただいていた、だから、ただ慚愧しかないんだと。こういうふうにつながってくるのではないのかなあということを思うわけですね。

曾我先生であつたとしても、仏法を極められたというふうに言つた瞬間に道は歩むものではなくなつてしまう。では曾我先生以外のもっと立派な人ならば、例えば親鸞聖人であるならば、そういうことは

ないのか。そうではないですね。道を求めた者に必然の問題ではないかと思うんですね。道を求めた者が必ず直面する問題、これもかつて、たしか貝沼さんにそのように教えられたんですけれども、もしその問題、自分は道を歩んでいるんだと、もしくは救われたんだと、そこに立ち止まつてしまう、もしそういうことがなければ、躓くということがないこととすれば、それは道を歩んでいないということなんだと。この問題ではないかと思うんですね。

二

『大無量寿經』を少し引かせていただきます。

『真宗聖典』一頁をお開きください。お經というのは六成就といひまして、六つのことが成就する、そこで仏法が語られるということが成り立つ。「我聞きたまえき」聞成就、「是くの如き」信成就、「一時」時成就、「仏」主成就、「王舍城耆闍崛山の中に住したまいき」处成就、「大比丘衆、万二千人と俱なりき」衆成就、対告衆ということですね。『大無量寿經』の会座に集まつた方々、「大比丘衆、万二千人と俱なりき。一切の大聖、神通已に達せりき。

其の名をば、尊者了本際」と続きますけれども、大比丘衆ですから、言ってみたら、声聞の方々です。直接にお釈迦さまの言葉を聞いている方々。

尊者了本際から五人は、五比丘といまして、お釈迦様のお話を聞いた最初の五人、一緒に修行をした五人の仲間といわれていますが、その次が、尊者名聞という方の友達連中が五人、その次が迦葉三兄弟という、化身土巻にも引かれる方々がありまして、そしてその次、尊者摩訶迦葉からが十大弟子プラスアルファの方々、三十一人、名前が出ています、尊者阿難までですね。「皆、斯等の如き上首たる者なり」。万二千人の大比丘衆のリーダー、上首たる者、三十一人の名前が列挙されております。頁を捲っていただきまして、「又、大乘の衆の菩薩と俱なりき」。声聞の比丘衆、それだけじゃなくて、大乘のよろろの菩薩も居たと。「普賢菩薩と妙徳菩薩」、これは普賢と文殊の二菩薩ですね。これは浄土成仏の菩薩といわれます。「慈氏菩薩」というのは弥勒菩薩。『無量寿経』の下巻に特に出てくる弥勒菩薩ですね。これは穢土成仏の菩薩といわれます。普賢菩薩、妙徳菩薩、慈氏菩薩等は出家の菩薩です。「此の賢劫の中の一切の菩薩に、又、賢護等の十六の正士あり

にき」、賢護等の十六の正士は在家の菩薩です。いわゆる娑婆世界の菩薩というふうに教えられます。これはまあ調べればそのように出てきます。そして、「善思議菩薩・信慧菩薩・空無菩薩」等は、他方世界から来集せる菩薩だというふうにいわれております。声聞衆と大乘の菩薩、その方々が「皆、普賢大士の徳に遵つて、諸の菩薩の無量の行願を具し、一切功德の法に安住せり」と。「普賢大士の徳」というのは、いわゆる教化ということ、一切衆生をすくうという、そのお仕事です。これも教えられるところなんですけれども、我々衆生をすくうについては、どこか遠い天上界に居るわけにはいけません。この人間世界の生死の中において、生死に永遠に留まり、我々にすくいをもたらしてくださる、その普賢大士の徳にしたがつて、無量の行願を具し、一切功德の法に安住せりと。ここところは、この後、「十方に遊歩して權方便を行じ、」云々というふうに出てきますが、ここは八相化儀というふうにいわれます。いわゆるお釈迦さま、ゴータマ・シッダールタが成道して正覺を得て、涅槃に入るまで、亡くなるまでですね、その物語を八つに分けて語る八相成道というのがあります。その八相成道がこの『大無量寿経』

でも語られるわけです。しかも、いま申しました、声聞衆、それから大乘の菩薩衆、その方々が皆、お釈迦さまと同じ道、八相で示される、そのあり方で歩むんだと。兜率天から下天して、託胎といって摩耶夫人の身、母胎に入って、その右脇より生じて、そして「吾、当に世に於いて無上尊と為るべし」、よく知られるのは天上天下唯我独尊というふうにいいますが、『大無量寿経』では「吾、当に世に於いて無上尊と為るべし」というふうに宣言をされます。人間としての誕生においての誓い、宣言ですね。そして、王宮にあり、その後、出家をして、降魔といつて、魔に誘惑されながら正覚を成る。そして、梵天勧請。帝釈天と梵天がその法を皆さんに語ってくださいといつて、初転法輪になる。そういうような物語がずーっと書いてあります。そして、是くの如き等の菩薩・大士、称げて計うべからず。一時に來会せりき。

（『真宗聖典』第二版7頁）

万二千人の大比丘衆、それから大乘の菩薩方、ここでは「計うべからず」、かぞえきれない、そういう道を求める方々です。仏道を求めると言ってもいいかもしれませんし、人間としての道を求める方々

です。これも教えられるところですけれども、私たち人間に生を受けたものとは何なのか。それは道を求めるものなんだ。人間の生を受けたということとは、何も金儲けをするとか、人助けをするとか、そういう為に生まれてきたんじゃない。道を求めるのが私たちなんだと。これが、まあこれも貝沼さんに教えてもらったことですが、仏教が見出した人間観というふうに教えられるところですね。

その方々が、「一時に來会せりき」、一時一処に集まったんだと。これが『大無量寿経』の会座です。一時に來会した、その時に世尊は「光顔巍巍」と。道を求める人が集まったその場所、ここにおいて光顔巍巍なんだと。言ってみたら、この欲聞座に集まった皆さんの会座が開かれた、そこに光顔巍巍たる相をあらわした、それが世尊なわけですね。聞法会の方が調ったと言ってもいいかもしれません。

一つ、疑問に思います。万二千人の声聞衆、そして大乘の菩薩の方々は皆、八相化儀ということで、お釈迦さまと同じ道を歩むというふうに語られます。つまり、お釈迦さまと同じ正覚を成した方々です。なぜ、仏はその方々に改めて説法をしなければならなかったのか。言ってみたら、正覚を成した方々で

す。ゴールインと言ってもいいかもしれません。その方々に改めて法を説くわけですね。これは何なのか。しかも、その説かれる法は、法蔵菩薩の物語です。

やはりこれも、先ほど来、言っています、道を求める者に必然する課題に応えた。『大無量寿経』においては法蔵菩薩の物語でそれが応えられている。法蔵菩薩とは菩提心の象徴です。永遠なる修行を続ける菩薩です。

『大経』には序分が二つありまして、今の八相化儀というところとは証信序といまして、教巻に引かれているのが發起序という、光顔巍巍とか、五徳現瑞のあるところですね。それを経て、出世本懷の文というのが出ます。

世に出興したまう所以は、道教を光闡して、群萌を拯い恵むに真実の利を以てせんと欲してなり
 (『真宗聖典』第二版 8 頁)

と。つまり、仏がこの世に出た、その本当の理由が『大経』にあり、ということです。色んなお経がある、八万四千の法門といわれるお経があるけれども、本当に仏さまが言いたかったのは『大経』であるという証明の文、それが「世に出興したまう所以は」

といういい方で、ここに出ています。

「真実の利を以てせんと欲してなり」。この真実の利、普通に読んだら、真実の利益ということですから、救いをもたらす功德と言えるかもしれません。が、親鸞聖人は「弥陀の誓願」といういい方で、『一念多念文意』でいっています。果ではなく、因でもって、救いの理由をいう、弥陀は衆生になつてすくうということです。

そして、この出世本懷の文が語られた、それに応じて、阿難は、

唯然り。願樂して聞きたまえんと欲う

(『真宗聖典』第二版 9 頁)

「願樂欲聞」というふうに応じるわけです。聞こうと。

三

出世本懷の文というと、もう一つ有名なお経があります。『法華経』です。岩波文庫の『法華経』を持ってきました。実はですね、『法華経』にも「願樂欲聞」という文があるんです。『法華経』はですね、これはご存知のように「三止三請」ということ

が説かれます。これはですね、こういうふうには『法華経』にあるんですが、

諸仏の智慧は甚だ深くして無量なり。その智慧の門は覺りがたく入りがたくして、一切の声聞辟支仏の知る能わざるところなり

つまり、智慧の門、仏の真実の覺りは声聞や辟支仏には分からののだと。だから、『法華経』のメインの対告衆は舍利弗ですけども、舍利弗に「止みなん止みなん」と、もうこれ以上は止めよう、もう説かない、といって釈尊は途中で説くことを止めるんです。それに対して、舍利弗が、そんなこと言わずに説いてくださいよという。もう止めよう、もう説かない、説いたって意味がない、無駄だという釈尊に対して、「やや願わくは世尊よこの事を敷衍したまえ」という。三止三請といって、これを三回繰り返すんです。「止みなん」は同じ言葉で、舍利弗は多少違う言葉で、説いてください、説いてください、説いてくださいと。三回、止みなん止みなん、それに対して一々、舍利弗は説いてくださいと。それで、では説こうとなるんです。では説こうと言った時に、五千人の比丘がその場を去るんです。私はもう分かった、私はもう、その仏の甚深の智慧を分

かったから聞く必要がないといって去る。それに對して釈尊は止めない。これが『法華経』の会座なんですね。一時來会の『大無量寿経』は全ての者に説くわけですが、『法華経』は聞く者を選んだわけです。

その三止三請があつて、では説こうと言つた時に、舍利弗が、「やや然り世尊よ、願わくは聞きたてまつらんと欲す」と。「唯然世尊願樂欲聞」というふうに、『大経』と同じ言葉を出すんですね。それで、その願樂欲聞と舍利弗が言つた後に、『法華経』における出世本懷の文が出ます。

諸々の仏世尊はただ一大事の因縁をもつての故にのみ出現したまえばなり

一大事因縁を説く為にこの世に出現したんだと、それは『法華経』だという形でいわれるわけですね。対しまして『大経』には、一番最初に拝読しましたように、下巻でもう一度、欲聞という言葉が登場します。流通分です。

設い大火有りて三千大千世界に充滿せんに、要ず当に此れを過ぎて是の經法を聞きて、歡喜信樂し、受持読誦し、説の如く修行すべし

東方偈にも同じような言葉がありますけれども、「大火有りて三千大千世界に充滿せんに、要ず当に此れを過ぎて」と、大火のただ中においてこの教を聞けと。親鸞聖人は「和讃」にもされておられますし、『教行信証』では、東方偈の引文も含めて、曇鸞大師の『讚阿弥陀仏偈』を引く形で道綽禪師の文、また善導大師がこの文を取り上げているものを引文しています。都合、三回、この言葉を『教行信証』に引用されている。この現実世界において法を聞けと。つまり、『大無量寿経』上巻においては「如来浄土の果」、浄土の世界が説かれる、下巻において「衆生往生の因果」、私たちの現実が説かれる。弥勒菩薩が「世人、実に爾なり」、お釈迦さまよ、そうだ、世の中の人はたしかにそうだ、というように応えていますけれども、この現実の世界を確かめていく、そしてその中において教法を聞けという流れの中で、

多く菩薩有りて、此の経を聞かんと欲えども得ること能わず
(同)

上巻においては「願樂して聞きたまえんと欲う」。阿難はこの教を聞きたい。下巻においては、「多有菩薩。欲聞此経。而不能得」、道を求める多くの菩薩

薩はあるけれども、この教を聞かんと願樂するけれども、聞くことが出来ないんだという。『大無量寿経』の奥深さですね。

繰り返し言っていますけれども、道を求めた者に必然する問題です。ただ単に道を求めればいいということではない。その道が求められなくなるという、私たちの現実に応じて、この文があるのではないかと思うんですね。

さらに言いますと、『大無量寿経』には出世本懷の文が二つあります。

当来の世に経道滅尽せんに、我、慈悲哀愍を以て、特に此の経を留めて止住すること百歳せん。其れ衆生有りて、斯の経に値う者は、意の所願に随いて皆得度すべし
(同)

と。これが第二の出世本懷。なぜ、釈尊がこの世に出たのか、それは『大無量寿経』を説く為だ。あらゆる経が失われたとしても、この経だけは残るんだと。この経を残す為に釈尊は世に出興したんだと、こういうことですね。

もう一度、第一の出世本懷のところをご覧ください。

善きかなや、阿難 (『真宗聖典』第二版 8 頁)

卷上において、第一の出世本懷は、「阿難」に説いています。

如来、無蓋の大悲を以て三界を矜哀したまう。

世に出興したまう所以は、道教を光闡して、群萌を拯い恵むに真実の利を以てせんと欲してなり

「真実の利を以て」。

無量億劫に値いたてまつること難く、見たてまつること難し。靈瑞華の、時あつて時に乃し出づるが猶し。今、問える所は饒益する所多し。

一切の諸天・人民を開化す

(同)

「一切の諸天・人民を開化す」。

阿難、当に知るべし。如来の正覚、其の智、量り難くして導御したまう所多し。慧見無碍にして、能く遏絶すること無し。一餐の力を以て、能く寿命を住めたまうこと、億百千劫無数無量にして、復た此れよりも過ぎたり

(同)

「一餐の力」というのは、一食、もしくは一口ということです。一口の食事でもって、命たもつこと「億百千劫無数無量」、無量のいのち、「無量寿」ですね。

これが一つ目の出世本懷の文でいわれていること

です。「阿難」に説いている、「真実の利」をもつて説く、「一切諸天・人民」をすくう、その期間は「無量」、尽きることがない、どこまでいっても救い続ける。

第二の出世本懷をご覧ください。このことを聞いているのは「弥勒」です。弥勒菩薩に人間の現実を説いているわけです。これも教えられることですが、れども、上巻は現実主義者の阿難に理想を説いています。浄土という世界、理想の世界を説いています。下巻は理想主義者の弥勒菩薩に人間の現実を説いている。こんなふうにも教えられますけれども、下巻の相手は弥勒です。

当来の世に経道滅尽せんに、我、慈悲哀愍を以て、特に此の経を留めて止住すること百歳せん

(『真宗聖典』第二版93頁)

「慈悲」をもつて説く。「真実の利」智慧をもつて説く上巻に対して、慈悲をもつて説くのだと。

そして、「一切諸天・人民」をすくうんだというのが上巻、第一の出世本懷でしたけれども、この第二の出世本懷は、

其れ衆生有りて、斯の経に値う者は、
です、「値斯経者」。

(同)

そして「百歳」、百年限定。上巻で説かれる第一の出世本懷は一切衆生を救う教えです。これは昨年、少し話をさせていただきましたけれども、一切衆生がすぐわれる、すくい「原理」が上巻において説かれる。全ての人がすぐわれるんだ、その教えがあるんだ、しかし、そんなすばらしい教えがあつたとしても、この私一人がすぐわれなければ、すくい「体験」がもたらされなければ、その教えは空しい。一人のすくいを誓ったのが下巻における出世本懷ではないか。「百歳」というのは「人寿百歳」、一人の人の人生と言つてもいいと思います。一人一人の人生に応じて、この『大無量寿經』が特留此經され

第一の出世本懷（上巻） “すくい”の原理“

智慧を以て — 一切の諸天・人民を

— 無量寿にわたつて — すくう

第二の出世本懷（下巻） “すくい”の体験“

慈悲を以て — この經にあう者を

— 百年のみ（一人の、この人生において） — すくう

ているんだと。こんなことが言えるのではないかと
思うんですね。

四

さらに、第一の出世本懷は、

無量億劫に値いたてまつること難く、見たてまつること難し。靈瑞華の、時あつて時に乃し出ずるが猶し（『真宗聖典』第二版8頁）

と、値うことが難いということをいっています。第二の出世本懷のところにも、同じような言葉が続いています。

如来の興世、値い難く見たてまつり難し。諸仏の經道、得難く聞き難し。菩薩の勝法・諸波羅蜜、聞くことを得ること亦難し。善知識に遇い、法を聞きて能く行ずること、此れ亦難しとす。若し斯の經を聞きて信樂受持すること、難きの中に難し、此れに過ぎて難きこと無し

（『真宗聖典』第二版93頁）

これは四難というふうにもいわれて、化身土巻にも引文がありますけれども、上巻のところで説かれる「難し」というのは、仏の興世に値う、言ってみ

たら、仏法に出あうというのが難しいということが書いてありました。この下巻においてはさらにそれを開く形で、詳しくする形で説かれます。言ってみれば、上巻では「仏にあうこと難し」ということで代表し、下巻でいうところの「如来の興世、値い難く見たてまつり難し」のみが説かれます。下巻では続いて、「諸仏の経道、得難く聞き難し。菩薩の勝法・諸波羅蜜、聞くことを得ること亦難し」と「法にあうこと難し」。「善知識に遇い、法を聞きて能く行ずること、此れ亦難しとす」と「僧にあうこと難し」。仏法僧にあうことが難しいというふうに詳しく述べてありますが、ここまでは「総じて一代教にわたる難なり」とし、そしてその次、「若し斯の経を聞きて信樂受持すること、難きが中に難し」を「別して本願にあうことの難きなり」としています。仏法僧にあうことは難しい、だけれども、もしもその仏法僧にあい得たとしても、それを信樂受持、信ずることが出来るのか、難信の問題ですね。これが「難きが中に難し、此れに過ぎて難きこと無し」。これを相伝には「別して本願にあうことの難きなり」というふうにいわれるわけですね。

まさしく、この私たちが、仏法に縁を結んだとしても、それを真にいただいて、信心獲得して、道を歩んでゆくことが出来るのか。それは難きが中にまた難しと。それに過ぎて難きことなしと。こういうことを教えられるんですね。

親鸞聖人はこれを「和讃」にもされておりますが、けれども、それはちよつと今日は抜きませんが、逆に言ってみれば、常に常にそのことを問い続けているからこそ、そのことを問いかけ続けるからこそ、『無量寿経』は「真実の教」たり得るのではないか。上巻においては、出世本懷の文が説かれた後に願樂欲聞という語が出ます。下巻に至って、人間の現実を知らしめられた後、聞こうと欲つても聞けないんだ、その告白に、第二の出世本懷の文が導かれました。言ってみれば、この欲聞、聞かんと欲うという、その精神が、上巻で説かれるすくいの中の「原理」、「理想」と言ってもいいかもしれませんが、それと下巻で説かれるすくいの中の「体験」、人間の現実をつなぐ、その精神、まあどういふ言い方がいいのか分かりませんが、よく使われるますからあんまり使いたくないんですが、魂、欲聞たる魂、こういうことを言えるのではないかなと思うんですね。すくい

の原理とすくい体験をつなぐ精神。真実の教えと一人の現実をむすぶ魂。その魂のことを、今回の講題で言えば、一闡提菩薩と。すくわれ終わることを許さない、その精神、魂だというふうにも言ってみたいなと思うんですね。

すくいを求めた者に必然する、すくわれたという想いですね。すくわれたという想いに座り込んでしまふ。真のすくいへの関心がいつの間にか失われていつて、無関心になってしまふ。この第二の出世本懐のところ、

我が滅度の後を以て、復た疑惑を生ずることを得ること無かれ（『真宗聖典』第二版93頁）

とあります。「我が滅度の後」です。これは、少し遡りまして、

吾、世を去りて後、経道漸く滅し人民諂偽ならん。復た衆悪を為らん。五焼、五痛、還りて前の法の如くならん。久しくして後、転た劇しからん（『真宗聖典』第二版84頁）

と。仏が世を去るんです。そうしたら、それまで流布していた仏の教えがだんだんだんに滅して、「還りて前の法の如くならん」、悪が蘇ってくる、「久しくして後、転た劇しからん」、悪が前よりも

ひどくなると。仏が世を去りて後というのは、言ってみたら、呼びかけが聞こえなくなった時ではないですかね。私たちが出あったはずの仏道を見失い、座り込んでいる、そのことが、仏が世を去りて後です。呼びかけが聞こえなくなった時です。お経の言葉答應にしました時です。「真実教」というと、その『大無量寿経』に真実が書かれているような、そんなことを思いますけれども、親鸞聖人は注意深く、教巻に、

夫れ真実の教を顕さば則ち『大無量寿経』、是れなり（『真宗聖典』第二版163頁）

このようにいわれます。真実は『大無量寿経』に書いてあるということではないんです。真実の教こそは『大無量寿経』だと。呼びかけの言葉として私たちがこの現実を生きていくことについて、その現実をあげて、大千世界の火のただ中において法を聞くということがなければ、『大無量寿経』は単なる文献に過ぎません。それは真実の教ではないわけです。

考えてみれば、現実世界というのは答えを求め続ける世の中ではないかなあと思うんですね。昨今のAIでもそうですね。将棋とか囲碁とかが、見てい

て各段に面白くなりました。一手一手ごとに今どちらが勝っているか、優勢かが分かる。まあそこから問いのようなことを導き出すことが出来るかもしれないけれども、何か、分かりやすい答え、正解を求め続けるあり方というのがあるんじゃないですかね。先ほどの開会の挨拶で藤原さんが震災のことを少し話されましたけれども、震災においても、いづか私たち人間の力でこれが解決できるに違いない、力を合わせて頑張りましょうと、そういう前提でもって支援活動が呼びかけられる。まあそうでしょう、そうじゃなければ、やっていられない。つまり、それが人間の避けられない現実ということです。それがダメだとは言えないわけです。戦争もそうです。今は悲惨な状態だけでも、話し合えば、何とかするんだと。勢い、仏さまの教えに聞いていこう、さすれば、戦争も止まるかもしれない。そうやって仏法に答えを求めている姿そのものが、仏が世を去りたまいて後の姿だと。まさしく双樹林下往生ではないですかね。理想の人生をなぞるばかりの、双樹林下往生。こんなことも思うわけあります。

法蔵菩薩が大きな課題として、この会があります。法蔵菩薩は歩み続ける菩提心の象徴。そしてもう一

つ言えば、法蔵菩薩は阿弥陀如来に成る菩薩です。すぐわれる菩薩だからこそ曾我量深先生は、法蔵菩薩が我となるんだと、「如来我となりて我を救ひ給ふ」「如来我となるとは法蔵菩薩降誕のことなり」、だから私たちはすぐわれるわけです。法蔵菩薩のすくいは必然なわけです。対しまして、どこまでもどこまでもすぐわれない現実、どこまでもどこまでもすくなれない魂。それを一闍提菩薩と言ってみたいんですね。それが下巻において説かれる、確かめられることなのではないかなあということを思うわけですね。

ただ一つ、これは課題としてあるのは、親鸞聖人は教巻で第一の出世本懷は取り上げますが、第二の、特留此経というのは、法然上人は『選択集』に一章を割いて、特留章という形で取り上げますが、親鸞聖人は引文としては、『教行信証』では善導大師の文を引く形で特留此経ということが出てきますけれども、『大無量寿経』の文を直接には取り上げていない。ですから、出世本懷と言えば、第一の出世本懷を親鸞聖人は取り上げるといことがありますが、これはまた考えていかなければならんところかなとは思います。

最後に、ちょっと今日は『教行信証』をあまり取り上げることが出来ませんでしたので、最後にちょっと『教行信証』ですけれども、信巻の最初のところに、

無上妙果の成じ難きに不ず、真実の信樂、実に獲ること難し
（『真宗聖典』第二版237頁）

ということがありますね。この言葉をいただいて、一つ、言いたいなと思います。またご批判いただければと思いますが、

凡夫の遇法、成じ難きにあらず、菩薩の聞法、実に獲ること難し

私たちが法にあうというのは、親鸞聖人は「無上妙果」といつていますが、それを目指すような形になります。そのことじゃないんだと。親鸞聖人のいい方で言えば、真実の信樂が獲難いんだと。これは、だからこそ、真実の信樂こそを獲よといっているわけではないです。獲難いんだと。いま、ここにこのようにして我が身があるという事実、そのことを本當にいただく、いただき続けていく、証し続けていく、それを獲難いと。そして今、僕の言ったこと例えば、私たちが法に出あう、遇法、そこじゃないんだと、菩薩の聞法といういい方ですが、聞法

の身をたまわる、それが菩薩たらしめられるということとも言いたいんですが、それを、獲ることが難いという表現でいうわけです。道を求め続ける、その歩みをいただく。一闡提菩薩。このように言ってみたくらいところですね。常に生まれかわる、その精神と言ってもいいかもしれません。以上であります。

【質疑応答】

A

第二の出世の本懐というのが『教行信証』に無いとおっしゃったんですけれども、『文類聚鈔』では入っているの、いいのではないのでしょうか。

宮田

考えます。そこはノーマークでした。

A

感想としては、行の一念が成されるところに第二の出世本懐の意味合いがあったような感じがしました。

（二〇二四年二月一日 名古屋教務所議事堂）